

ニュースレター

No. 17

CONTENTS

○巻頭言	1
○新しいプロジェクト「依存症とキリスト教」	2
○セミナー「共に生きるために」	3・4
○足尾を訪れた二宮尊徳と坂田 祐	4・5
○研究員・客員研究員の広場	6

News Letter



巻 頭 言 所 長 松 田 和 憲

4月からスタートした本年度の研究所の歩みも早くも半年を経過しましたが、それぞれの研究グループ、プロジェクトチームが独自に企画運営を行って活発な研究活動を展開しております。そこで、今回は本年度前半の研究所活動の一端をお知らせして「巻頭言」としたいと思います。

前号でもご紹介したように、本年度の研究所にとって特筆すべきことは、何と云っても研究所叢書第1号『バプテストの歴史的貢献』（関東学院大学出版会、2007年）を出版することができたということです。これは関東学院の信仰のルーツである「バプテスト」に関する優れた研究書で、研究者たちの間で注目を集めており、早くも叢書第2号の発刊を目指して準備を始めているところです。「バプテスト」をルーツに持つ本研究所の独自性を活かす研究が、国内の第一級の「バプテスト」研究者たちを取り込みながら更なる広がりを見せていければと願っています。

各グループが主催する研究会や公開講演会、シンポジウムも活発に行われました。特にその中で印象に残った二つの公開講演会を手短に紹介しますと、第一番目は6月に「坂田祐」研究プロジェクト主催で開催された公開講演会で、講演者は歴史作家・新井田良子氏、演題は「校訓『人になれ 奉仕せよ』の先駆けとして—坂田祐の祖父・日向内記と父・中村富造の生涯—」であり、第一次資料に基づいて坂田祐の祖父と両親の生涯を中心に、また坂田祐の青少年時代に関する興味深いお話を頂くことができ感謝でございました。第二番目は、10月に「いのち」を考える研究グループ主催による公開講演会です。講演者は東京シュール出版勤務の須永祐慈氏、演題は「あの時の気持ちで伝えたいこと」、須永氏は小学4年生のとき、転校先の学校でひどいじめを受け、2年ほど不登校になり、やっと東京シュールというフリースクールに出会って居場所を見出したこと、そうしたご自身の体験をそのまま語ってくださいました。わたしの授業を振替にして参加を勧めた約400名の学生に深い感銘を与えました。学生たちの感想文から、「いのち」は大変デリケートでこわれやすいもの、だからこそ大事にされねばならないこと、そうした事柄を自分自身の経験と重ね合わせて感じとってくれたことが読み取れました。研究所が発足して6年目を迎えました、こんなに大勢の学生達を交えての集会は始めてであり、研究所もいささか市民権を得たような感じを抱いています。これを機に、これからも学生たちが参加できる集いを企画したいと願っています。

去る11月初旬、広島女学院大学で開催された2007年度・キリスト教文化学会学術大会に出席して参りました。「世界平和とキリスト教—多民族・多文化・多宗教共生時代における平和を求めて—」という主題のもと、基調講演、シンポジウムなどを通して活発な意見交換がなされ、有益なひとときを過ごしてきました。中でも交わりや懇親会のときに、何人もの方から、我らが「キリスト教と文化研究所」の動向に関心を抱いておられるとの言葉を頂きました。それらの言葉を要約すれば、研究テーマが多岐に亘り、いくつかのグループが独自に研究を行っていること、また、研究所に対して、学部推薦で所員を送り出し、50名を超える内外の研究員を取り込みながら、学部横断的な活動を活発に行い、かつそれが機能しているのではないかとのご意見でした。もちろん、研究所としての課題もなくはありませんが、基本的なところで、内外から注目を集めていることに意を強くして帰ってきました。今後も地道な活動を続けていきたいと思っております。

時おりしも、本研究所の存在を根幹から支える「キリスト」の降誕を迎える季節に入っております。このニュースレターをお読みくださる方々の上に、御子の降誕の恵みが豊かにありますように心から祈ります。

2007年度「依存症とキリスト教研究」プロジェクト研究計画

所員・プロジェクトリーダー 安田 八十五

現代日本社会における最大の課題は、「依存症社会」の末期症状を呈していることであり、また、それに伴う障害や問題が多数発生しており、社会全体が極めて危機的な状況に陥っていることである。「依存症」(Dependency)とは、「嗜癖」(しへき) (Addiction)とも言われ、元々、精神医学やカウンセリング分野の概念であり、用語である。「アルコール依存症」は、比較的良好に知られており、麻酔性・依存性のある薬物(化学物質)であるアルコールの入っているお酒を習慣的に大量に取り込み続けて陥る身体と精神の両方の病気である。

アルコールという化学物質をとり続けたために、お酒を止めることができなくなり、脳が麻痺してしまうために、家庭内で妻や子供などに物理的暴力や暴言(言葉による暴力)を行使し、家庭を「機能不全家族」(Dysfunctional Family)にしてしまう。

「依存症人間」(Dependent Person・Addictive Man)とは、いわば、「依存症を持病として抱えている人間のことであり、ことに自覚症状の無い、自分が依存症なのに、依存症であることを認識していないか、または、認めようとしないう人間」と、筆者は定義している。多くの依存症人間から形成され、「依存的人間関係」(Dependent Human Relationship)を人間関係の基調とする社会を「依存症社会」(Dependent Society・Addictive Society)と呼ぶことにする。現代日本社会は、まさに、この依存症社会そのものになってしまっている。

本研究プロジェクトの主たる目的は、この「依存症」及び「依存症社会」の構造と特質をキリスト教の観点から分析し、解決のための方法と手段を探ることにする。ことに、依存症からの回復のために安田・三井・田代等が実践しているキリスト教に基づく12ステップ方式による自助グループの活動を外部展開し、その有効性を検証し、普及をめざすとともにその学問的裏付けを強化する。本プロジ

エクトは、2007年度から設置された。関東学院大学キリスト教と文化研究所報「キリスト教と文化」第5号(2007年3月発行)に、同メンバーの安田・三井・田代の3名が「依存症とキリスト教」に関する研究論文3編を寄稿しており、それがキッカケで「依存症とキリスト教」研究プロジェクトが計画され、発足することになった。

本研究プロジェクトは、2007年度-2009年度の3カ年計画で進める予定であるが、主な研究課題としては、下記のテーマを計画している。

- ①依存症に関する総合的調査研究—人文社会科学的研究及びキリスト教との関係の調査研究
- ②依存症社会に関する総合的調査研究—人文社会科学的研究・社会システム論的アプローチ及びキリスト教との関係の調査研究
- ③依存症と依存症社会に関するキリスト教との関係の基礎的調査研究
- ④依存症からの回復のための12ステップ方式自助グループの実践と実践的研究
- ⑤不登校・引きこもり等の最近の大学生等に起こっている学生依存症問題に関する研究

研究計画と研究日程は、下記のように予定している。

◇第1年度目・2007年度
調査研究フレームワークの策定と確立・基礎的調査研究の実施・定例研究会の開催・12ステップ方式自助グループの実践

◇第2年度目・2008年度
中間シンポジウムの開催・定例研究会の開催・12ステップ方式自助グループの実践と評価

◇第3年度目・2009年度
最終シンポジウムの開催・定例研究会の開催・12ステップ方式自助グループの実践と発展・出版計画の準備

また日本への観光客、により「国際」が身近になった。しかしマスメディア等の発達は世界の政情、事件により人々の生活に影響が及ぼされている光景が瞬時に私たちの知るところになる。「知る」ことによってもたらされる責任もある。現在世界191カ国、64億人が生活している。その8割が開発途上国で、小学校にいけない子供：1.3億人（1/5人）、働いている子供の数：2.5億人（2/5人）、1日1ドル（115円）以下で生活している人々の数：13億人（1/5人）安全な水が飲めない→28%、文字が読めない→8.5億人 1/4人（15才～）、乳児死亡率：日本は4/1000人、インドネシアは38人（9倍）、日本のGDPは約38千ドル/年。フィリピンは1100ドル、ブルンジは90ドルである。

自己の経験や帰国してきたJOCV隊員、NGOの友人はボランティアについて「奉仕」というよりも、より相互作用的、「共に生きる」的なものと語った。ボランティアで行かれた方々は口々に、「自己も学ぶところが多かった」また、何らかの「変革」を起こすものでもあると語る方が多い。長期的なとらえ方や少々個人的な取り組み方も存在し、その現場

は自分の身の回りにあるのかもしれないが、何らかのきっかけとなる活動となり得る。ボランティアの精神はどこでも生きるものであり、もっと社会で評価をして欲しい。

アジア学院の活動について野崎威三男氏より説明していただきました。アジア学院の使命は、イエス・キリストの愛に基づき、個人が自己の潜在能力を最大限に発揮できるような、公正且つ平和で健全な環境を持つ世界を構築することにある。共に分かち合う生き方を目指して、農村指導者の養成と訓練を行っている。主としてアジア、アフリカ、太平洋地域の農村共同体に生き、働いている男女の指導者たちが、毎年職員やアジア学院に集うその他の人々と共に学びの共同体を形成する。この共同体に根ざした学びを通して、私たちは農村の人々が地域で自分たちの持っている資源や能力を共通の目的のために分かち合い、活用する最善の方法を見出してゆく。食べものといのちについての独自のアプローチによって、我々自身と全世界に問いかけを続けていきたい。

（文責：勘田義治）

足尾を訪れた二宮尊徳と坂田 祐（1）

— 足尾再訪の思い出 —

坂田祐研究プロジェクト研究員 矢嶋 道文

●二宮尊徳と足尾

今から10年ほど前のこと、足尾を調査・訪問する機会を得た。江戸時代の後期、二宮尊徳（天明7・1787—安政3・1856）が足尾を訪れていたからである。

江戸時代、足尾は日光御神領（徳川家康・家光神領等：幕府直轄地）と称されたが、尊徳は当時荒廃していた足尾の村々の復興（廻村）を幕府から依頼されたのだった。尊徳が廻村したのは嘉永6（1853）年、折から江戸にはペリーが来航し、長崎にはロシアのプチャーチンが来航、幕府は東西の海防策におおわらわであった。実は、尊徳の足尾廻村には前史がある。

すなわち、幕府は廻村に先立つ9年前の弘化元（1844）年、尊徳に日光御神領の調査を依頼している。尊徳はこれに答え、その2年後、60巻にわたる復興計画書（仕法書雛形）を幕府に提出し終えた。しかし幕府は尊徳に対し、御神領仕法着手を命ずることはなかった。尊徳は幕府に仕法雛形（計画書）を提出した同年、生地である小田原藩から「故障之次第有之」（こしょうのしだい、これあり）として尊徳による「仕法廃止」（小田原藩の解任）を決めていたのである。

当時尊徳は60歳、関東一円の開発復興（仕法）に努める名士であった。小田原藩解任となった尊徳は、郷里小田原への立ち入りはもとより、先祖の墓参りも厳禁となった。なぜ尊徳が小田原藩解任となったかの

セミナー「共に生きるために」

「国際理解とボランティア」研究プロジェクト

去る2007年3月10日（土）13：00より、KGU 関内メディアセンターを会場にキリスト教と文化研究所の「国際理解とボランティア」プロジェクト主催で公開セミナーが開催されました。

弘前大学教授大西純氏に基調講演をいただき、アジアにおける国際理解や開発援助とボランティア活動の実践の場にたずさわの方々、野崎威三男氏（アジア学院校長）上石博人氏（独立行政法人国際協力機構（JICA）職員）梅田祥司氏（関東学院六浦小学校教諭）を講師としてお招きし、総合司会である吉川成美氏（北京大学中国社会信用研究所客員研究員）による進行のもと、共生や支援活動について紹介、発題していただいた。

大西純氏は「日本とタイ」異文化理解と共存と題し、日本とタイの違いを文化に重点を置き説明して下さいました。各国文化を知る上での共通する4つの価値観とは、「1. 集団主義と個人主義」、「2. 権力格差に対する容認度の高低」、「3. 不確実性に対する許容度の文化の違いでは、タイの集団主義に対しては日本の方が個人主義が強く、権力格差に対する容認度は日本のほうが低い。不確実性に対する許容度は日本のほうが低く、日本のほうが男性社会であるという調査結果がある。日本人がタイ人と共に生きる上では様々な注意が必要である。タイ人は行動において公私の区別をはっきりとつけない、時間に縛られない、女性の社会進出が進んでおり教育の格差が強い、自分の意見を人前で出さない、仕事に対して私生活を犠牲にすることは好まない、人間関係において自分との上下関係をはっきりさせようとする、円滑にコミュニケーションを取るためにはこれらの注意が必要である。

関東学院六浦小学校の奉仕活動（タイ・ティワタ村子供寮への支援活動）について梅田祥司氏より説明していただいた。タイでは人口の大半をタイ系と中国系が占めますが、山岳部にはカレン族やモン族、アカ族などの少

数民族が暮らしている。タイ国内の約四十万人のカレン族は他の種族と同じように自分たちの文字と言葉をもっているのに、タイ国内ではタイ語の読み書きができなければ生活することができない。寮の子どもたちの両親はみんな山の中でカレン語を使っている。子どもたちは学校に行き、タイ語を習得する必要があるが、現金収入のほとんどない親は、子どもを学校に行かせたくても通わせることができなかった。現地ファイナムカウ教会（カレンバプテスト同盟）のダウ牧師により家が遠くて学校に通えない子供たちのために1992年に村に寮が建設された。1994年冬に六浦小学校教員達が最初の訪問をし、以降、六浦小学校児童による第一回タイ訪問団（2003年8月）、第二回タイ訪問団（2004年8月）、第三回タイ訪問団（2005年8月）、第四回タイ訪問団（2006年8月）、第五回タイ訪問団（2006年12月）と現地との交流を重ねている。子ども達の言語を超えた交流は同じキリスト教を通して共に折り合う間柄としてつながっている。「ティワタの子ども達は、不幸ではなく、不便なだけだ。」この言葉は、物事の本質を見抜き子どもの目の鋭さを物語っている。また、2005年12月には六浦小学校とチェンマイを回線で結んだ同時中継子ども交流会を開催し、メディアを通しての交流を可能にした。やがてはビデオチャットができるように設備を整えていく予定である。

六浦小学校児童によるチパレ委員会では、古着市の売り上げとぶどうの会からの献金、サッカーシューズの寄贈、写真を通して顔の見えるカード交流などを現在も行っている。子供たちはお互いに、相手の存在を実感することによって、国際交流の手応えをつかみ、寮との交流をより一層深める体制ができた。

身近になった「国際」と「ボランティア」について上石博人氏より説明していただいた。サッカー、オリンピック、他国における自然災害やボランティアの活躍等が報道される事、

真相は不明であるが、尊徳の教えがキリシタンの教えの如く浸透し、領民が藩命よりも尊徳の教えを受け入れるようになっていたという研究史の指摘もある。

失意の中、かつて尊徳が開発復興に力を貸した相馬藩（藩主相馬大膳）から幕府への嘆願書がだされることになった。その内容は「尊徳による御神領仕法への今後10年間毎年500両の支援」（1両はおよそ5万円程度）という破格のものであった。このような経緯のもと、尊徳は嘉永6年、晴れて日光「御神領仕法」への着手（廻村）となったのである。このうち、足尾への廻村は第2回目のものであり、嘉永6年8月9日から17日に至る9日間計25か村のうち13か村が足尾への廻村であった（細編「二宮尊徳の農政思想—日光『御神領仕法』の理論と実践—」【経済系】第187集、1996年参照）。

●坂田祐と足尾

中学関東学院初代学院長となった坂田祐（設立者C. B. テンネー）は、明治29（1896）年から明治31（1898）年までの間、足尾銅山で働いていた。坂田『恩寵の生涯』年譜には「この頃まで銅山で働いていたが、勉学の念おさえがたく、この夏（明治29年）ついに家を飛び出して東京に向かった。旅費を得るために、途中いろいろ労働し、東京上野に着いたのは秋であった。…それから東京、横浜、横須賀、浦賀等で労働したが、…ついに栃木県の足尾銅山に來り」とある。坂田祐、18歳から20歳までの青年期のことである。足尾での坂田（当時中村姓）は、銅山の電気関係を担っていた坂田組に入り飯場で働いていた。三春台の「坂田記念館」には、坂田組時代の貴重な写真があり、電気関係とはいえ、鉦夫姿10代後半の坂田祐は相当の迫力がある。この坂田の足尾時代については、現在、当研究所の坂田祐研究プロジェクトチーム（リーダー・帆苅猛人間環境学部教授）で調査中である。

●足尾再訪のきっかけ

私が尊徳の調査で足尾を訪れたのが1995（平成7）年であるから、2006年の訪問は11年ぶりのことといえる。訪問のきっかけは不思議なものであった。昨年秋、文学部では比較文化学科の企画で学芸員課程の展示会（学院創立125周年記念特別展示会）を釜利谷健康管

理センター敷地にある小講堂で初めて行った。その際、1階新設のフロアで「坂田祐写真展」（展示21点）を行った（2階は「須坂藩主堀家伝来物」を特別展示）。当日は報道（TV・新聞）が入り熱気に包まれたが、何よりも光栄であったのは跡を継がれた坂田創先生のご来館であった。

当記念展は、「キリスト教と文化研究所」の後援を受けており、展示写真の選定と搬入にご協力いただいたのは帆苅猛先生であった。その3ヵ月ほど前、坂田研究チームの調査で帆苅先生が「記念館」を訪れた際に私も同行した。その折、同館を管理する鍛冶さんから一枚の名刺を預かった。その名刺には、中里由美子さん（ご主人は霞ヶ丘教会のピアノ調律士）とあった。鍛冶さんの説明では、中里さんは古川市兵衛（足尾銅山経営者）の姻戚者で、「近年、足尾に坂田祐の記念プレートを立てたが、関東学院関係者は誰一人として植樹に訪れるものはいない」と言われていたとのことであった。足尾は江戸時代からの鉦山開発と、その後に繁殖した野生鹿で荒れ、10年前（私が訪問した翌年）から植樹が行われていた。

名刺を片手に、早速中里さんにお電話して事情を伺ったが、是非、関東学院のどなたかが足尾に行き植樹していただければとのことであった。お電話で中里さんが古川市兵衛の孫ということを知り、さらに驚いた。瞬時に、公害の足尾（古河）と言う歴史的な負債を担われて、永い間お辛かったのではとも考え、青年時代の坂田祐が働いた足尾の再評価ができないものかと思った。私の大学時代のゼミ（小林正彬名誉教授）は日本近代史であり、古川と無縁ではなかった。日本近代史への貢献という度合いでは、古川銅山は正に一級である。この事実を、古川銅山の公害に異を唱え天皇に直訴した田中正造像とも考え合せて、どのように正當に評価するかという問題である。足尾時代を有する坂田自身への評価としても、足尾銅山の再評価は必要であった。私は、釜利谷小講堂の展示室に飾られた青年期足尾の坂田と、東京帝国大学に提出された彼の卒業論文をみて、何とかこの課題を解決し得ないものかと思った。（続く）

研究者・客員研究員の「広場」

◆ 自己紹介 研究者 佐藤光重

今年度より研究所の末席に座らせていただくこととなります、法学部の佐藤光重と申します。

専門は植民地時代（17-18世紀）アメリカのピューリタン文学で、詩人アン・ブラッドストリート（Anne Bradstreet）、詩人にして牧師エドワード・テイラー（Edward Taylor）、牧師コットン・マザー（Cotton Mather）らのテキストを研究してきました。自然や環境問題と文学との関わりにも興味があり、19世紀の作家ヘンリー・ソロー（Henry Thoreau）を中心とした、自然文学（Nature Writing）についても研究しております。いわば、アメリカ文化を宗教（ピューリタニズム）とスピリチュアリズム（自然崇拜）とから考察するのが、私の研究手法です。

かねてから村椿先生よりお誘いいただき、研究会への参加を決めました。アメリカ・バプテストの始祖とも目されるロジャー・ウィリアムズ（Roger Williams）を以前から研究したかったところ、バプテスト研究者の先生からお誘いを受けたのは奇縁でした。研究はまだ端緒に着いたばかりですが、ウィリアムズが現代社会に遺した有益な示唆を考究したいと願っております。

◆ 「神学的洞察力の必要性」 客員研究員 森島 豊

「キリスト教と文化研究所」に所属させていただいております森島豊と申します。昨年イギリスの神学者P.T.フォーサイスについて博士論文を書きました。主にイギリス宗教改革から19世紀までのイギリス神学思想に注目しております。これらの学びの目的は現代を深くとらえることであります。そのためにもキリスト教が起こる前の思想から現代に至るまでの長い歴史を持つキリスト教思想史を念頭におきながら研究に取り組んでおります。

上記にありますように、私は現代において「神学」の重要性を回復したいと願っております。「神学無き西欧化」という言葉があります。欧米から多くのものを学び取っているが、そこで最も重要な役割を果たしている神学無しに社会を形成しようとしているこの国の姿を表した言葉でありましょう。それはこの国に生きている人間形成にも深く関わっていると思います。しかもその問題をとらえられない現代社会の姿があります。私は今日の問題を考える時に神学的な洞察が必要なのだということを中心とし、自らもその視点から学びたいと願っております。本研究所におきましてはボランティア、文化について考察しながら、関東学院大学の建学の精神である「人になれ、奉仕せよ」の神学的基盤を明らかにしていきたいと願っております。

◆ よろしくお願ひします 客員研究員 原 真由美

2001年に「キリスト教と文化研究所」開設のニュースを知り、何か新しい試みが始まっている事が感じられ、どんな研究がなされて行くのだろうかという期待がありました。当時の私は研究所と直接の関係はなく、ルーサーライス大学大学院牧会神学博士課程に学び牧会神学博士号を取るのに懸命でした。その後、2006年9月に客員研究員にして頂き、現在「バプテスト研究」のグループに参加させて頂いています。

参加した当初は、年齢や専門も違う研究会の独自性もありとまどいましたが、最近では何よりもバプテスト研究発表や意見交換、新しい知見が得られる貴重な場となると共に、私にとっては諸先輩方がいるという心強い場となっています。

これまで私はバプテストの婦人会組織の歴史を研究しており、現在は、第二次世界大戦後の復興期のバプテスト同盟が組織された頃の婦人会、現「全国女性会」の成立期について研究しています。併せて、19世紀のアメリカの海外伝道（インド）において、共にバプテストとなった宣教師ジャドソンを資金面で支えるため、単身アメリカに戻り南北アメリカを巡回して支援を訴えた同労者ルーサーライスについても研究できればと思います。どうぞよろしくお願ひします。

関東学院大学 キリスト教と文化研究所

〒236-8501

神奈川県横浜市金沢区六浦東一丁目50番1号

TEL：045-786-7873（研究所直通）

発行者：松田 和憲

Director: Kazunori Matsuda